

富岡製糸場に勤めた女性たちのライフヒストリー

～昭和期の「あたりまえ」の書き残し～

高崎商科大学職員 川又 彩夏

1 研究の実施状況

(1) 研究期間

2020年7月～2021年1月

(2) 実施場所

富岡市中心市街地（高崎商科大学富岡サテライト他）
片倉工業株式会社片倉シルク記念館、岡谷蚕糸博物館

(3) 参加人数

1名

(4) 研究内容

明治期の富岡製糸場で働く女性たちの姿は、映画「赤い襷」や小説『明治ガールズ——富岡製糸場で青春を』などに描かれ、その様子は広く伝えられている。一方で、民間企業に払い下げられた後の様子を知るすべは少ない。これは、富岡製糸場が操業を終了したのが1987（昭和62）年と、製糸場が稼働した115年間の歴史の中ではごく最近のことであり、その様子を覚えている世代が多く、工場が動き、そこで働く人がいることが「あたりまえ」であり、当時を知る彼らにとって特別な姿ではなかったからだろう。

しかし、2021年の今、「あたりまえ」でなくなってから30年以上が経過している。

そこで、今回、戦後の片倉工業時代の富岡製糸場で働いた女性たちの労働と生活の様子に注目し、彼女たちの口から語られた経験を通じて、その実態を記述する。さらには、彼女たちだけではなく、当時の様子を知る男性従業員やまちなかの商店主に聞き取り調査を行うことで、彼女たちの労働と生活について、より多角的に描き出すこととした。

本研究では、彼女たち自身の経験や記憶、記録を主な研究対象としている。聞き取り調査の中で彼女たちが語った労働や生活の様子から共通項を見出し、片倉工業富岡工場での経験が、彼女たちの中でどのようなものであったかを検討した。

彼女たちは片倉工業富岡工場での就労や寮生活を通じ、他者とのかかわりや民主主義的価値観、生活に必要な炊事や洗濯など家事運営能力を身につけるに至った。これは、片倉工業による従業員教育の成果だけでなく、寮生活そのものが学びの機会であったためである。彼女たちは仕事や従業員教育等のフォーマルな機会を通じた学びと、寮生活というインフォーマルな機会での学びを経験している。ここで学んだことは、結婚や子育てといった、彼女たちの次なるライフステージで活かされている。その点、彼女たちは社会の入り口に立ったばかりであり、中学校を卒業した15歳の少女たちにとって片倉工業富岡工場は「小さな社会」でもあったといえる。

さらに、彼女たちと同僚や先輩のつながりは、単に仕事上だけのものではない。仕事や生活を共にしたからこそ、つよい信頼関係でつながっていた。このつながりは人事係など彼女たちにとっての管理者との間にも見られるものであった。今回の調査の中でインタビューが先輩従業員を「お母さん」や「姉」などと表現していること、また、インタビューの一人でもある元人事係の男性従業員が女性従業員たちのことを、まるで子供の幸せを願うようなまなざしで日々見守っていたことから、片倉工業富岡工場は疑似的な「大きな家族」と言えよう。

今回、聞き取り調査を通じ、そこで働く女性たちにとって片倉工業富岡工場が「小さな社会」「大きな家族」であったことが示された。しかしながら、今回、元従業員から聞き取り調査を実施できたのは6名であり、当時の様子を描き出すには十分とはいえない。引き続き、聞き取り調査を実施し、より多くの女性たちから記憶を語ってもらうことで、彼女たちの生活や労働のあり方を検討することが可能となる。



2 研究の成果

1. 問題背景と目的

富岡製糸場で働く女性たちの生活がいかなるものであったのか、これまで様々な切り口から研究が進められてきた。特に、明治の官営模範工場時代の仕事や寮生活の様子は和田英(旧姓・横田英)による『富岡日記』によってその様子は広く知られている。一方で、富岡製糸場が民間に払い下げられて以来、『富岡日記』のような回顧録や手記の存在は、現時点で表立ったものは存在せず、そこでの女性たちの仕事や暮らしに関する様子をうかがい知るすべは少ない。しかしながら、富岡製糸場が操業を停止してから、“まだ”34年しか経過しておらず、戦後の片倉工業時代の記憶を有している人も多いはずである。

本研究は実際に働いた女性たちや、彼女たちの雇い主である片倉工業、そして近隣の地域住民や店主らの中にある記憶や記録を掘り起こすことで、片倉工業時代の富岡製糸場で働いた女性たちの生活と労働の様子を体系的に記録する。

2. 先行研究の整理

2.1. 富岡製糸場に関する先行研究

これまで、富岡製糸場を対象とした研究は人文社会系、建築学系など様々な切り口から取り組まれている。

中でも、『富岡製糸場誌』(富岡製糸場誌編さん委員会 1977)は、創業時を中心に、製糸場の産業文化的価値を解明することを目的に発行された。その中には「工女の思い出(ききがき)」(富岡製糸場誌編さん委員会 1977: 1131-1187)として、原製糸時代の従業員や関係者15名への聞き取りの記録が掲載されている。仕事や寮生活の様子などが生き生きと語られているものの、本研究で対象としている戦後の片倉工業時代の記録ではなく、戦後の様子を知るには十分とはいえない。

また、富岡製糸場総合研究センターによって毎年発行されている『富岡製糸場総合研究センター報告書』には、これまでに刊行された10冊の報告書に36本の論文が掲載されている。この36本のうち、最も多く取り組まれたテーマは建築物・建造物に関するテーマである。一方で、実際に働いた従業員を対象としたのは、2本とその数は決して多くない。

片倉工業時代の富岡製糸場に勤めた女性たちへの聞き取りをまとめたものとして、茂木(2017)がある。富岡製糸場誌編さん委員会や富岡市教育委員会など、富岡市が進めてきた元従業員への聞き取り調査の結果について記載されている。片倉工業時代の記述として、およそ60名の元従業員に実施した聞き取り調査の結果を扱っているが、一つ一つの記述は短く、十分に体系だった資料とはいえず、当時の様子を鮮明に描き出したものとは言い難い。

2.2. 製糸業に関わる女性たちを対象とした調査

製糸工場に勤めた女性たちを対象とした研究として、長野県岡谷市の取り組みが挙げられる。岡谷市では、岡谷蚕糸博物館を中心に市内の製糸工場に就労した経験を有する18名に聞き取り調査を実施。その内容が『岡谷蚕糸博物館紀要』にまとめられている。彼女たちからは、仕事の喜びや苦しみが語られており、彼女たちが日々を懸命に生きた様子が明らかになっている。

また、岡谷市内の製糸工場の元従業員に焦点を当て、ミクロな視点から元従業員の女性たちの労働や生活について考察したのが、シャル(2020)である。シャルは製糸労働者たちの間で歌われた「糸引き歌」の分析や、実際に働いた女性たちへの聞き取り調査を実施し、これまでの製糸労働に持たれていた「女工哀史」の視点が現代の価値観やマクロ経済学の視点から切り取られたものであると指摘した。

岡谷蚕糸博物館やシャルは、岡谷市の製糸業を支えた女性たちの実態と、彼女たちが誇りをもって仕事に従事していた様子を描き出している。

3. 本研究の意義

富岡製糸場が34年前まで稼働していたことから、当時の様子を「あたりまえ」の風景にとらえ、記憶している人もいだろう。しかしながら、当時の様子を知る人々も年々高齢になってきた。さらに、戦後・片倉工業時代の富岡製糸場には、官営模範工場時代に和田英が書き残した回顧録のようなものは存在せず、当時の様子を知るすべは少ない。よって、時間を追うにつれて当時の様子をリアルな描写で書き残すことは困難をきたす。

そこで、今回、岡谷市の取り組みを参考に、実際に働いた女性に有する記憶や記録を掘り起こすことで、彼女たちが働いた様子をよりリアルに書き残すことが可能となる。さらに、彼女たちを管理する立ち場にあった

表1 『富岡製糸場総合研究センター報告書』掲載論文タイトル一覧

内容	論文タイトル	掲載年
経営に関する研究	富岡製糸場の経営実態に関する一考察——特に戦時代の好機と片倉時代の全期について	2013年
	官営期における経営実態に関する一考察——特に高品質を目指した生糸生産の実態について	2014年
	日本専売製造(株)富岡機における富岡製糸場の経営実態——昭和18年11月～21年4月期の経営	2015年
	富岡製糸場の長官化に関する一考察	2016年
	官営期における富岡製糸場の実績報告書の分析——歳出面を会計制度の変遷との関係から見て	2017年
ポール・ブリーユナに関する研究	三井製糸機についての一考察	2019年
	富岡製糸場のお雇い外国人に関する調査報告——特に主張ポール・ブリーユナの事績に焦点を当てて	2010年
	日本国の憲法に関するイギリス公使館書記官アダムズによる報告——アダムズ報告(第1次～第4次とブリーユナの報告書)	2011年
	エシュト・リアンタル紹介と同商会横浜支店長ガイゼンハイマーによる生糸産地調査の成果から	2012年
	インド支店におけるポール・ブリーユナ——「トンキンの貿易の研究」から	2013年
	富岡製糸場のお雇いフランス人たち——フランス現地調査の成果から	2015年
	富岡製糸場の首長ポール・ブリーユナに対する同時代の評価——ブリーユナの学歴から	2016年
	富岡製糸場の製糸用水について——片倉工業株式会社の寄託資料を中心として	2013年
建設・建築物に関する研究	富岡製糸場の設立にかかわる横須賀製紙所との関係性について——「ヴェルニー書庫」の分析を中心に	2014年
	富岡製糸場における昭和20年代の施設、設備の変遷について——片倉工業株式会社寄託資料の報告	2014年
	富岡製糸場における昭和20年代後半から30年代初期の施設、設備の変遷について——片倉工業株式会社寄託資料の報告	2015年
	富岡製糸場西蔵庫所保存修理工事関連調査報告歴史の木部漆喰天井及び漆喰壁の保存修理について——欧米の取り組み状況を中心として	2016年
	富岡製糸場の各種製造所跡について——埋蔵文化財発掘調査の成果を受けて	2016年
	富岡製糸場の寄託資料の変遷について——埋蔵文化財発掘調査の成果を受けて	2017年
	史跡「富岡製糸場の確認調査について——埋蔵文化財調査の成果を受けて	2018年
	富岡製糸場に入られたフランス製器械に関する考察——水分検査器と台秤について	2014年
図解・機械に関する研究	富岡製糸場における繰糸機の変遷——片倉期から満生までの繰糸機の特徴と変化について	2014年
	フランス式繰糸機におけるケンネル部とその位置づけ	2019年
	富岡製糸場の水害(水損)に罹ったポンプに関する一考察	2019年
「富岡製糸場の産業遺産」に関する研究	富岡製糸場と絹産地産地——特に富岡製糸場と高山社との関係性について	2012年
	富岡製糸場の産業遺産としての保存活用——システムとして残し伝えるための一考察	2017年
	富岡製糸場の産業遺産としての保存活用——システムとして残し伝えるための一考察	2017年
富岡製糸場に関する研究	富岡製糸場の産業遺産としての保存活用——システムとして残し伝えるための一考察	2017年
	「尾高監査先生之肖像」(明治6年)に関する一考察——富岡製糸場初代場長 尾高守忠の肖像	2018年
	日官富岡製糸場の設立当初の労働環境に関する研究——19世紀フランスの製糸工場との比較を中心に	2012年
富岡製糸場の労働に関する研究	昭和20年戦後半から30年代初期の片倉製糸工場の女子労働環境について——組合機関誌に見る女子労働者の要望	2018年
	富岡製糸場における女子労働者の教育・教養習得環境の変遷——産業遺産としての一側面の考察——	2013年
	富岡製糸場の労働と暮らしにかかわる調査について——これまでの経緯と今後の計画	2017年
その他	フランス・ボネとトミオカー——「平成26年度富岡製糸場資料選-ボネとトミオカー」報告	2015年
	資料に見る原合名会社と原富岡製糸所——明治大学図書館所蔵「クリスチャン・ボックツ コレクション」から	2017年
	原正史会社について	2019年
	富岡製糸場の影響を受けた製糸場「富岡製」について	2019年

(『富岡製糸場総合研究センター報告書』をもとに筆者作成。なお、分類は筆者が行った。)

表2 茂木(2017)に掲載された聞き取り調査の内容

No.	取り扱っているインタビュー内容	インタビュー数	インタビューの就労時期	インタビュー実施年
1	『富岡製糸場誌』掲載「工女の思い出(ききがき)」	14名	原合名会社	昭和48年頃
2	富岡市教育委員会による聞き取り調査	およそ50名	片倉工業株式会社	2006(平成18)年
3	富岡総合研究センターによる聞き取り調査	4名	片倉工業株式会社(昭和20年代後半～60年代)	2008(平成20)年以降
4	富岡市による聞き取り調査	8名	片倉工業株式会社	2014(平成26)年

(茂木(2017)をもとに、筆者作成)

片倉工業の事務社員や、彼女たちの様子を身近で見っていた近隣住民・商店主らが有する記憶や記録も対象にする。これにより、女性従業員の労働と生活について、多角的な掘り下げが可能となる。これらを体系的に整理することで、戦後の片倉工業富岡工場で働いた女性たちの労働や生活の実態を書き残し、当時の「あたりまえ」を現代に伝えることが可能となる。

4. 研究方法

本研究では、戦後1950(昭和25)年から、富岡製糸場が操業を停止した1987(昭和62)年までのおよそ40年の間に片倉工業富岡工場で働いた女性たちの労働と生活に関する記録と記憶を対象とする。ライフヒストリー

法を参考に、当事者自身に経験を語ってもらうことで、よりリアルな視点を得ることを目指した。

今回は、片倉工業富岡工場に勤務経験のある女性4名、男性2名、富岡市内の別の製糸工場に勤めた男性1名の合計7名に聞き取り調査を実施。さらに、本研究においては、聞き取り調査の他、片倉工業が1948（昭和28）年より発行している社内報「かたくら」や、片倉工業が従業員教育に使用した教科書などを用い、片倉工業がそこで働く女性たちに求めた姿がいかなるものであったかを考察した。

表3 2020年度研究協力者一覧（インタビューのみ）

人物	A	B	E	C	F	D	G	O
インタビュー実施日	2020（令和2）年9月15日	2020（令和2）年10月20日	2020（令和2）年10月20日	2020（令和2）年12月20日	2020（令和2）年12月20日	2020（令和2）年12月26日	2020（令和2）年10月26日	新型コロナウイルスの感染拡大により未実施
生まれ	1940（昭和15）年	1932（昭和7）年	1934（昭和9）年	1939（昭和14）年	1646（昭和21）年	1961（昭和36）年	1646（昭和21）年	※
性別	女性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	男性
勤め先	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	片倉工業株式会社	富岡製糸所	製糸場近隣住民（従業員ではないため、該当せず）
入社年	1956（昭和31）年	1946（昭和21）年	1948（昭和23）年ごろ	1954（昭和29）年	1971（昭和46）年	1977（昭和52）年ごろ	1960（昭和35）年	従業員ではないため、該当せず
退職	1959（昭和34）年	昭和30年頃（年～9年間の退職）		1987（昭和62）年		1981（昭和56）年ごろ	1974（昭和49）年	従業員ではないため、該当せず
主な仕事内容	糸取り	糸取り 揚げ返し	露乾機 露出荷	糸取り 夜の管理	原料科 総務部人事課	糸取り	人事	従業員ではないため、該当せず

（筆者作成）

5. 内容

今回聞き取り調査を実施したうち、片倉工業富岡製工場に勤めた女性たち4名は就労時期が異なるものの、皆、敷地内に建てられた寮で生活を送った経験を有している。聞き取り調査の内容をもとに、それぞれの項目について検討する。

5.1. 労働に関する記憶

戦後の片倉工業富岡工場に勤めた女性たちは、入社後、およそ3か月間の養成期間を与えられた。D氏は、研修期間に先輩従業員から糸取りの工程を習い、業務を覚えた後は、先輩従業員から何かを教わる場面は少なく、「仕事を覚え、コツをつかめばどんどん（糸取りが）早くなった」と話し、いかに糸を早く取るか、自分自身に課していたという。

一方、女性従業員の中には、一般的な従業員とは異なり、現場をまとめる役を担う「教婦」という立場も存在した。昭和30年代における教婦の役割は、「工務課長や試験係が立案した方針や経過を図るため、設備と工具を合理的に組織し運営する現場監督者」（差波 2020：116）である。上からの指示を現場に伝え、現場の意見を上に伝えるパイプ役でもあった教婦は知識や技能、人間的魅力が求められた（片倉工業株式会社 1988：617）。教婦の経験を有するD氏は、当時、彼女自身が糸を取るのではなく、従業員の作業状況を踏まえ、自動繰糸機の速さを調整したり、繰糸業を担当するほかの従業員のフォローに入ることが主な仕事であった。

昭和30年代の教婦は職場での現場監督に加え、従業員が生活する寮においてもまとめ役を担ったようであったが、D氏が教婦の立場に就いた昭和50年代では寮生活の管理を任された覚えはないという。当時、教婦の仕事として先輩従業員のフォローに入る際、「みんないい人だけど、ちょっと嫌な思いもすることがあった」と話す。仕事は仕事と割り切り、寮生活に影響はなかったと語る。

工場で働き、場内の寮で生活を送った彼女たちにとって、労働と生活の場は一体であったものの、職場・寮のそれぞれの場面における役割は必ずしも一致したものではなかったことがうかがえる。

5.2. 寮生活に関する記憶

彼女たちの寮生活において、生活に必要な衣食住の多くは会社から提供されるものであった。本項目では、彼女たちの生活における衣食住の様子について整理する。

5.2.1. 衣

彼女たちは就業中、会社から貸与された作業着を身につけていた。戦後の片倉工業では、動きやすさを重視したズボンスタイルが採用され、頭にはキャップを付けていた。

それらの制服は片倉工業から貸与されたものであるが、就業中、制服の管理は、すべて彼女たち自身で行っていた。彼女たちは洗濯が終わった上着・ズボン、キャップといったすべての作業着にアイロンをかけ、皺を

伸ばした。昭和50年代に勤務したD氏は就職時に持参したアイロンを使い、すべての作業着の皺を「ピシッ」と伸ばしていたという。寮生活における洗濯後のアイロンがけは彼女が身につけた技術の一つであり、結婚後も家事の一環としてのアイロンがけに苦勞することはなかった様子を語っている。

5.2.2. 食

食事については、朝・昼・晩の三食が敷地内の食堂で提供されていたが、彼女たちは寮の自室でも食べることを楽しんでた。

寮には台所や調理ができるような場所はなかったものの、部屋には炊飯器やトースターを持ち込むことができた。自室で食事を楽しむ彼女たちは、自室の炊飯器でご飯を炊き、まちなかのスーパーで購入した惣菜で食事を楽しんだという。

さらに、甘味を求める彼女たちは、富岡市中心市街地の菓子店に出かけることも少なくなかった。B氏は、「扇屋」（富岡市富岡1173-1）や、当時、生菓子屋を営んでいた「ひとつもと」（富岡市富岡1066）に通い、お菓子を購入し、寮の自室に持ち帰っていた。また、富岡工場の目のまえ、現在の「はや味」（富岡市富岡51）の場所に店を構えていた日用品店にも簡単な菓子が販売されており、D氏はそこで購入した菓子類を寮の部屋に持ち帰り、同僚の友達とともに楽しんだと語っている。

5.2.3. 住

片倉工業に勤めた多くの女性たちが敷地内の寮で生活していた。富岡工場では、敷地の南側に位置した妙義寮、浅間寮、榛名寮が彼女たちの住まいであった。

3つの寮は「片倉工業株式会社富岡工場片倉富岡寄宿舍自治会」によって運営されていた。寮で生活する女性従業員（寮生）を構成員とする片倉富岡寄宿舍自治会は、「明るい楽しい寄宿舍生活の発展につとめると共に文化の向上を図ること」（片倉富岡寄宿舍自治会 1972：8）を目的に設立されており、規約に則り、寮生たち相互の協力による自治によって運営されていた。

従業員の多くは、入社直後の3か月の研修期間中を大勢の同期入社の従業員と同じ部屋で過ごす。その後、数名ずつに分かれ、同期入社の従業員と先輩従業員が同じ部屋で生活した。各部屋の部屋長は部屋の管理や後輩従業員の指導を担当した。部屋長との関係性は良好のようで、B氏は、休日には部屋長や同室の先輩と映画を観に行くと語る。さらに、B氏自身が部屋長を担った際には、新しく入った従業員に対し、洗濯物の洗い方や畳み方を教えている。彼女は後輩に対し、「私のことをお母さんだと思ってくれ」と伝え、後輩女性もB氏のことを慕っていたという。

また、A氏も先輩従業員のことを「お姉さんみたいであった」と語っており、彼女たち従業員同士の心理的な距離感は近いものであったことがうかがえる。

D氏は部屋長や先輩従業員とともに何かをした覚えはあまりないというが、場内や休日には常に行動を共にした同僚がいたと話す。

そこで働いた女性の多くが、生活と仕事を同じ敷地内で行っていた。常に同じメンバーと顔を合わせていたことになるが、彼女たちが語った同僚や先輩と関係性は往々にして良好であり、彼女たちの間に信頼しあえる関係性が構築されていたことがわかる。

5.3. 学び

片倉工業に勤めた女性たちの多くが、中学校を卒業した直後に働き始めている。そのため、片倉工業では、富岡工場に限らず、従業員が働きながら、中学校卒業後の学びを積み重ねられるよう、各事業所に「片倉学園」を開設した。さらには、普通科高校卒業を目指す従業員に対しては、近隣の定時制高校への進学支援も行っていた。

5.3.1. 片倉学園

片倉工業における教育制度の歴史は古く、明治の創業時より、従業員に対し、読書や算術、裁縫などを指導している。1948（昭和23）年には教育刷新委員会を設立。自社で教育要綱を作成し、各事業所に「片倉〇〇学園」（〇〇には事業所名が入る）を設置した。「民主主義を身につけること」「常識ある職業人となること」「立派な婦人となること」の3点を根本理念に据えた教育がなされた。片倉工業富岡工場には、「片倉富岡学園」が設置され、従業員たちの教育活動がすすめられたのである。

1948（昭和23）年時点、学園は、本科、高等科、専攻科の3科から構成された。本科は中学校を卒業した従業員を対象に、「職業」「国語」「社会」「音楽体操」「家庭」を、高等科では、本科を終了した従業員を対象に「国語」「社会」「音楽体操」「家庭」を必修科目として授業を展開した。専攻科では高等科を卒業した従業員を対象に、和裁、洋裁、生け花、調理など実習が行われた。すべての科目において、上記の教育目的、根本理念に基づいた教育内容が組まれていた。その様子をよく知ることができるのが「社会」科目と「家庭」科目である。特に、

「社会」の科目はその位置づけを社内報「かたくら」の中で、下記のように示している。

学校教育でいう「社会科」の内容は、社会という人間結合の関係全般にわたる広域的なものでしょうが、当社の教育に於ける「社会科」はこれと自ら趣を異にしております。……当社教育の根本理念には①民主主義を身につける②有能な職業人になる③立派な婦人になる、という三本の柱があります。当社の「社会科」はこの要請にこたえる主要な科目として、最も重んじられています。……職場での共同作業や寄宿舎での自治生活で、その完全な一員となることが有能な職業人であり、ことによって民主主義社会を構成する素質も統治されると信ずるからであります。

(片倉工業株式会社 1988 : 256)

実際に片倉学園で利用された社会科の教科書『私たちの社会科』（片倉工業株式会社教科書編集委員会 1964）で取り上げられた単元は下記の通りである。普通科高校で習うような日本史や世界史、地理などは少ないものの、自分とは異なる他者といかに関係性を構築するか、将来、平和で明るい家庭を作るためにどうすればよいかを思考する内容が盛り込まれている。いわゆる、道徳や倫理のような科目に近い単元が多く、片倉学園で学ぶ彼女たちが、将来良き妻、親となるための土台作りの役割を有していたと考えられる。

表4 『私たちの社会科』で取り扱っている単元

1.学校の門から社会の門へ	12.健全な精神	23.日本人の考え方
2.青年期	13.誠実	24.文化と教養
3.働くということ	14.正直ということ	25.共産主義と民主主義
4.働きつつ学ぶ	15.義務と利益	26.やしろ
5.日記の書き方	16.権利と責任	27.釈迦の幼時
6.労働関係の歴史	17.友情	28.耶蘇と女性
7.現代の労働問題	18.衣食と礼節	29.孔子の理想
8.初心忘れるべからず	19.社会生活	30.恋愛
9.労働問題	20.国家と個人	31.結婚とはなにか
10.若き女性に	21.社会道徳	32.配偶者を選ぶには
11.幸福の意味	22.世界と日本	33.家庭生活

(片倉工業株式会社教科書編集委員会 (1964) をもとに筆者作成)

5.3.2. 家庭寮

また、片倉学園の教育の根本理念に掲げられた「立派な婦人となること」を体現するかのごとく、家庭科目の実践の場として、「家庭寮」が存在した。家庭寮とは、実践的な家事運営を身につける場であり、家庭科目の総仕上げの際に利用される寮である。片倉学園の生徒(従業員) 5～10名ほどが一組となり、一組2週間程度、家庭寮で生活し、家事技能を身につける。期間中は家庭寮が彼女たちにとっての生活の場となるため、自分たちで料理や洗濯といった家事全般をこなしながら仕事にも取り組んでいた。

家庭寮が「家庭」科目の総仕上げとして位置付けられていることから、そこで学んだ主な年齢層は20歳前後の女性たちであったと考えられる。1975(昭和50)年の女性の平均初婚年齢は24.2歳である(男女共同参画局)。まさに家庭寮は彼女たちが、結婚直前に家事運営、家庭生活における能力を身につける最後の機会であった。「家庭」科目について、社内報「かたくら」では下記のように記されており、「家庭」科目の重要性に触れられている。

家庭生活の能力を養う「家庭寮」で総仕上げ

当社に就業する女子従業員は、そのほとんどが義務教育を終えただけの人たちであります。そして会社を去れば直ちに家庭に、という道をたどるのが通常であります。したがって当社での勤勉は、おそらく学校・学園という名のつく最後の教育の機会になるでしょう。

当社の教育の根本的な目標の一つ、立派な婦人をつくるということが、非常に重要な意味をもつものためです。即ち、彼女らの家庭生活の能力は、主として当社の教育によって与えられねばならない、ということが出来ます。会社はこのことをまた一つの社会的責任とも感じております。

(片倉工業株式会社 1988 : 256)



家庭寮を経験したB氏は、そこで調理法を学び、実際に稲荷ずしやカレーなど作ったという。現在、88歳のB氏であるが、60年以上前に学んだカレーの作り方で今なお作り続けているという。結婚後、義母から料理などを教わったというが、家庭寮での学びが彼女たちのその後の人生の礎の一つになっている様子がうかがえる。

5.3.3. 定時制高校

片倉工業は昭和30年代以降、従業員の定時制高校への進学支援も開始した。これは、彼女たちが高等学校卒業資格を得るためである。富岡工場の従業員は富岡東高校の定時制に通っていた。1972（昭和47）年の二交代制の勤務が開始した後は、昼間の定時制を実施していた藤岡高校の定時制に進学した者もいた。

片倉工業は、片倉学園に限らず、従業員の学びをサポートしていたといえる。

5.4. 企業の視点からの女性の労働と生活の切り取り

5.4.1. 片倉工業が描く女性従業員の将来

近代の家族は、男性は外で働き、女性は家の中で働くことが一般的である。特に、戦後の高度経済成長期以降、収入の安定と生活の合理化によって、女性は専業主婦となり、家事や子育てに専念することが多くなった。また、1975（昭和50）年における25～29歳の女性の年齢階級別労働力率は42.6%と決して高くない（男女共同参画局）。同年における女性の初婚年齢は、先述のとおり、24.2歳であることから、結婚を機に退職していることがうかがえる。

1974（昭和49）年の片倉工業富岡工場入社案内の表紙には「卒業→就職から結婚へ」という言葉とともに、中学校を卒業したばかりと思われるセーラー服姿の少女、作業着を着て働く女性、白無垢姿の3人の女性が描かれている。募集時から、片倉工業富岡工場に勤める女性たちのその後のキャリアとして、結婚というステージを意識していることがわかる。



図1 1974（昭和49）年片倉工業富岡工場入社パンフレット表紙

（インタビューイ C氏提供資料）

片倉工業が新しく入った従業員に配布したテキスト『わたしたちの職場』（片倉工業株式会社 1969）の随所に、合理的な労働や規則正しい寮生活を送ること、民主的な会合運営を身につけることが記されている。そして、それらが彼女たちの将来を豊かにするものであると説いている。このような価値観を身につけた彼女たちの将来の姿として描かれていたのが良き妻、母となることであり、「明朗で健康な家庭の中心になり、次世代の国民を育てる」（片倉工業株式会社 1969：65）ことが求められていた。

片倉工業は、女性従業員を生糸の生産における単なる労働力としてではなく、将来、次世代を育てる「未来の親」もしくは「親の卵」として捉えていたのだろう。よい次世代が育つよう、将来、結婚を控えた彼女たちに対して、場内での労働、寮生活を通じて、個人と社会のあり方を正しく把握する力を身につける必要性を説いていた。

片倉工業富岡製糸場で人事係を担当したF氏は、「自分たちは彼女たちを親元から預かった立場」とであると語り、そのため、「結婚するまではきちんとさせる」という意識があったという。彼女たちの両親から嫁入り前の娘たちを預かる立場として、彼女たちがより正しい道に進んでほしい、と願ったF氏の想いは、親のそれ



と類似するものであった。

5.4.2. 女性従業員を管理する立場にあった片倉工業との関係性

片倉工業富岡工場では、多くの女性従業員が中学校を卒業した15歳で働き始めた。そのため、人事係を担当したF氏は「彼女たちが悪い方に引っ張られないよう、仕事以外に、学びや遊びにも忙しい環境を作った」という。例えば、富岡市宮本町の商店街で開催された七夕の際には彼女たちと笹飾りを作り、工場の正門の前に飾った。東北から来た従業員らとは芋煮会などを開催。厳しくするのではなく、彼女たちを楽しませながら生活を見守っていたのである。

また、F氏は彼女たち一人ひとりの状況を把握するよう努めていた。彼女たちと積極的にコミュニケーションをとるだけでなく、敷地内の診療所に通い、そこに勤務する看護師が気付いた彼女たちの変化についてもアンテナを張り、状況の把握を怠らなかった。

さらに、片倉工業は彼女たちの親と父兄会を開催。F氏は場合により家庭訪問をし、彼女たちの工場での様子などを伝え、父兄からも彼女たちの話を聞いていたという。F氏は父兄から「よろしく願います」という言葉をもらうことで、「預かっている彼女たちに事故が起こらないように」そして、「彼女たちが自身の路を歩めるようにしなくてはいけないと思っていた」と語る。彼女たちを管理する立場として、中学校を卒業したばかりの15歳の少女本人との信頼関係を築くことはもちろん、その親とも関係性を築くことを重視していたといえる。

6. まとめ

今回、戦後の片倉工業富岡工場に勤めた女性たちに注目し、聞き取り調査を実施。そこでの労働と生活の様子を検討した。今回聞き取り調査を行った7名のうち、片倉工業富岡工場での勤務経験があるのは男女6名のみであり、その数は決して多いとは言えない。しかしながら、昭和20年代から昭和50年代まで幅広い年代の様子を把握することができた。また、女性従業員だけでなく、彼女たちを陰ながらサポートした男性社員にも話を聞くことで、多角的な視点から当時の様子を把握することが可能となった。

6.1. 本研究が示唆すること

従業員の多くが中学校を卒業してすぐ、片倉工業に就職し、社会人としての生活をスタートさせている。それまで家族や中学校など「第一次集団」の中で生活していた彼女たちは、就職を機に、職場という「第二次集団」に身を置いたことになる。第一次集団とは、C. H. クーリーが提唱した集団概念であり、家族や遊戯集団、近隣集団に見られるような、親密的な接触に基づく結合からなる集団であり、強い共感・一体感が共有される集団である。一般的に第二次集団は、第一次集団と対比する集団とされる。第二次集団は、規則や法律に基づき、目的を合理的に追求する機能集団であり、間接的で、非人格制を特質とする。家族や近隣集団が一次集団であるのに対し、企業は第二次集団と位置付けられる。すなわち、中学校を卒業し、片倉工業に就職した彼女たちは15歳で第二次集団に身を置いたことになる。

しかしながら、彼女たちは仕事の先輩や後輩、同僚と衣食住や学びを共有している。彼女たちにとってそこは第二次集団であるが、一方で、青春を共にした仲間がいる場所でもある。その場所で信頼関係を培った彼女たちには「ともに生活している」というコミュニティの意識が存在したと言えよう。つまり、彼女たちにおいて、本来、第二次集団であったはずの場所に、それとほぼ重なる状態で第一次集団と類似する集団が存在していたと言えよう。

6.2. 考察

今回のインタビューを通じ、彼女たちの労働と生活を描くうえで、いくつかの視点を得ることができた。

6.2.1. 視点1：つながり

入社後、研修期間中に先輩が後輩に仕事のやり方を教えることは多くの職場でも行われている。しかしながら、敷地内の寮で生活をした彼女たちは、生活の場面も先輩や後輩、同僚とともに過ごした。また、入社したての彼女たちの年齢は中学校を卒業したばかりの15歳の少女であった。少女たちに対し、先輩従業員たちは、寮生活のルールや掃除、洗濯を教えた。そのような先輩従業員を母や姉のようだと感じていたことから、彼女たちの関係性は、単なる仕事上の先輩・後輩にとどまるものではなかった。

また、時を同じくして入社した同僚とは、休日も常に行動を共にし、お互いが支えあう存在であった。

さらに、彼女たちを管理する立場にある片倉工業は、従業員とのコミュニケーションを重要視していた。人事の業務として彼女たちの様子を書類上で把握するだけでなく、密なコミュニケーションをとることで、お互いの信頼関係の構築を目指していた。

仕事と生活をともにする彼女たちの中には、まるで、母子・姉妹関係ともとれる先輩-後輩の縦のつながり

や、同僚・友だちで支えあう横のつながりが存在した。また、彼女たちを管理する立場にあった片倉工業やその人事係は彼女たちの将来を案じ、日々の仕事や生活を見守っていた。その姿は、親が子の幸せを願う姿のようであり、片倉工業と彼女たちの間に親子関係ともいえるつながりを見出すことができた。

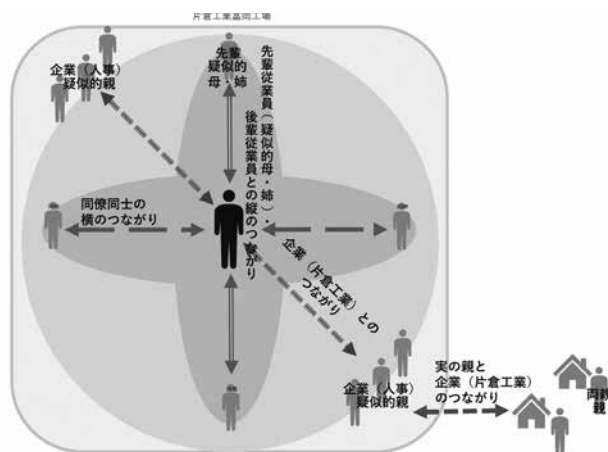


図2 片倉工業富岡工場におけるつながり
(筆者作成)

6.2.2. 視点2：教え

片倉工業で働く彼女たちにとって、そこは労働と生活の場としての機能に加え、学び舎としての側面も持ち合わせていた。

片倉学園では、人間性をはぐくむ教育が重視され、価値観や考え方などを身につける機会が設けられた。中でも、「家庭寮」では料理など家庭運営に関する技術を習得することができた。彼女たちが将来結婚し、そこで学んだ料理を自身の家族にふるまう。家庭寮での学びが妻や母としての役割を果たすための一端を担ったといえよう。

教えの場は片倉学園などの学びの場だけで行われたものではない。先輩従業員は新しく入った従業員へ、寮での掃除や洗濯の方法などを教えた。寮生活の中で先輩従業員から後輩従業員へ、実践的な教えが存在したことになる。

片倉工業富岡工業で働いた女性たちは、労働や学園といったフォーマルな場での学びだけでなく、従業員同士の寮生活といったインフォーマルな場面で無意識的に教えを受け入れ、様々な技術を身につけていったのである。

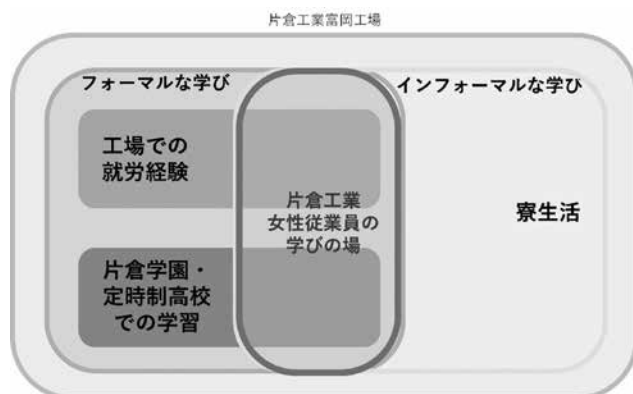


図3 片倉工業富岡工場における女性たちの学び
(筆者作成)

6.3. 研究結果に対する考察のまとめ

15歳で片倉工業富岡工場に足を踏み入れた少女たちの生活は、それまでのものとは一変した。彼女たちは親元を離れ、責任ある一労働者としての生活をスタートさせたのである。労働者として求められることは、より質の高い成果や効率の良い作業であった。さらに、寮生活では年齢や出身地といったバックグラウンドが違う複数の人たちとの共同生活がスタートした。まさに、これまでの第一次集団で生活をしてきたころとは異なる社会との出会いであったと言えよう。さらに、彼女たちは将来、結婚し、妻として、そして母としての役割を担うことを期待されていた。片倉工業富岡工場での労働・寮生活の経験は彼女たちの次なるライフステージで活かされていた。片倉工業入社当時、女性従業員の多くは社会の入り口に立ったに過ぎない。いうなれば、15歳で親元を離れた彼女たちは就職と同時に「小さな社会」に足を踏み入れたのである。

それまでの社会とは異なる「小さな社会」に身を置いた彼女たちを支えたのは先輩従業員や同僚、雇い主である片倉工業であった。先に入社した女性たちが入社したばかりの少女たちに仕事や寮での生活を教えた。会社は彼女たちを親元から預かった立場としての責任を全うすることに努め、彼女たちの将来を案じ、労働を通して今後必要となる考え方を、学園や定時制高校など勉学の機会を通して知識や価値観を伝えた。先輩従業員の姿はまるで、子や妹を思う母・姉のようであり、彼女たちを管理する立場であった片倉工業やその人事係の姿は、あたかも子供の将来を願い、見守る親のようであった。そこで働く女性たちにとって、片倉工業富岡工場は就労と生活の場であると同時に、彼女たちを支える「家族」的な側面を有していた。

それはまさに片倉工業富岡工場が彼女たちにとって「小さな社会」と「大きな家族」であったと言えよう。

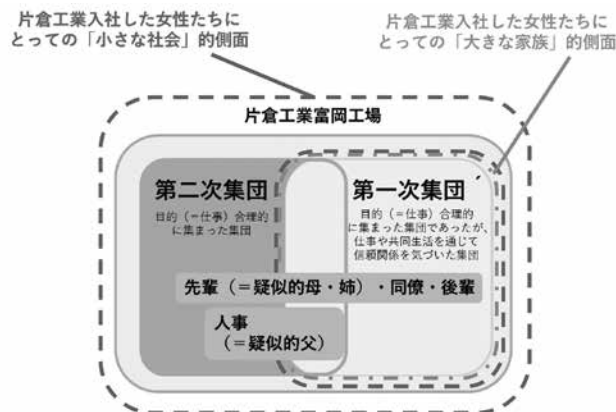


図4 片倉工業に入社した女性たちにとっての「小さな社会」と「大きな家族」
(筆者作成)

6.4. 課題と展望

今回、昭和20年代以降に片倉工業富岡工場に勤めた男女6名に聞き取り調査を行った。勤めた年代もインタビューの持つバックグラウンドも異なる6名であったが、彼女・彼らに共通する2つの視点を導き出すに至った。しかしながら、今回導き出した2つの視点を普遍的なものとして捉えるには、あまりにも情報が少ない。引き続き元従業員らへの聞き取り調査を進める必要がある。多くの人が片倉工業富岡工場での経験を語ることで、当時の労働と生活の様子をより鮮明に記すことが可能となる。

一方で、これらの聞き取り調査の結果は彼女たち一人一人の記憶に過ぎない。しかしながら、多くの女性たちがその記憶を語ることで、労働や生活の様子を当時の社会的・文化的文脈の中で捉え直すことが可能となる。強いては、それが女性労働史上の単なる「点」ではなく、社会的・文化的文脈の中に位置づけられ、現代のわれわれに、いかにつながっていったかを示すこととなる。そのためには、片倉工業就労時の様子だけでなく、その前後の彼女たちの記憶や記録にも焦点を当て、片倉工業での経験が彼女たちにとっていかなるものであったのかを読み解く必要がある。

また、町とのつながりは今回の調査では明らかにすることができなかった。彼女たちがまちなかでどのような体験をしたのか。彼女たちが買い物をした店の店主はどのように受け入れていたのか。まちなかの人には彼女たちに対してどのような印象を抱いていたのか。どのようなかわりがあったのか、もしくはなかったのか、片倉工業に勤めた女性たちの視点だけでなく、商店主や近隣住民からの語りを掘り下げることで、当時の様子

をより鮮明に描き出すことが可能となろう。こちらについても次年度以降の課題となった。

女性たちの「あたりまえ」を描き出すためには、就労時の点だけでなく、その前後の経験を含めた線での語りが必要である。さらに、彼女たちを雇い管理する立場にあった片倉工業や、同じ地域で過ごした地域住民など、様々な立場からの語りを加え、より鮮明な「あたりまえ」の書き出しを進めたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、聞き取り調査を行った7名には多大なるご協力をいただいた。また、片倉工業株式会社片倉シルク記念館には貴重な資料をご提供いただいた。片倉工業年金機構にはOB会をご紹介いただいた。さらに、富岡の店主の皆様には片倉工業元従業員らをご紹介いただいた。改めてここに御礼申し上げる。

参考文献

- 赤星礼子・奥村美代子編, 2013, 『新版生活経営学』九州大学出版会。
市川和夫, 2019, 『岡谷製糸王国記, 信州の寒村に起きた奇跡』鳥影社。
岡野雅枝, 2013, 「富岡製糸場における女子労働者の教育・教養習得機械の変遷——産業遺産としての一側面の考察」, 富岡市, 『平成24年度富岡製糸場総合研究センター報告書』1-41。
岡谷市・岡谷蚕糸博物館, 1994, 『シルク岡谷製糸業の歴史——History of “Silk Okaya”』。
岡谷蚕糸博物館紀要編集委員会(市立岡谷蚕糸博物館)編, 1996, 『岡谷蚕糸博物館紀要1号』。
——, 1997, 『岡谷蚕糸博物館紀要2号』。
——, 1998, 『岡谷蚕糸博物館紀要3号』。
——, 1999, 『岡谷蚕糸博物館紀要4号』。
——, 2000, 『岡谷蚕糸博物館紀要5号』。
——, 2001, 『岡谷蚕糸博物館紀要6号』。
——, 2002, 『岡谷蚕糸博物館紀要7号』。
——, 2003, 『岡谷蚕糸博物館紀要8号』。
——, 2004, 『岡谷蚕糸博物館紀要9号』。
——, 2005, 『岡谷蚕糸博物館紀要10号』。
——, 2006, 『岡谷蚕糸博物館紀要11号』。
——, 2007, 『岡谷蚕糸博物館紀要12号』。
——, 2008, 『岡谷蚕糸博物館紀要13号』。
——, 2009, 『岡谷蚕糸博物館紀要14号』。
片倉工業株式会社, 1969, 『わたしたちの職場』。
片倉工業株式会社編, 1988, 『かたくら縮刷版』。
片倉工業株式会社教科書編集委員会編, 1964, 『私たちの社会科』。
片倉工業株式会社調査課編, 1951, 『片倉工業株式会社三十年誌』。
桜井厚・小林多寿子, 2005, 『ライフヒストリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房。
佐藤真弓, 2016, 『生活と家族——家政学からの学び』一藝社。
サンドラ・シャル, 2020, 『「女工哀史」を再考する——失われた女性の声を求めて』京都大学学術出版会。
高林千幸・林久美子・吉野八重子編, 2020, 『岡谷蚕糸博物館—シルクファクトおかや—図録』岡谷蚕糸博物館—シルクファクトおかや—。
田中正人編, 2019, 『社会学用語図鑑』プレジデント社。
富岡市, 2012, 『平成23年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2013, 『平成24年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2014, 『平成25年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2015, 『平成26年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2016, 『平成27年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2017, 『平成28年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2018, 『平成29年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。
——, 2019, 『令和元年度富岡製糸場総合研究センター報告書』。



- , 2020, 『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』.
- 富岡市・岡野雅枝編, 2020, 『富岡製糸場——継承される革新の歴史』
- 富岡市教育委員会, 2010, 『富岡製糸場総合研究センター報告書富岡製糸場のお雇い外国人に関する調査報告——特に首長ポール・ブリユナの実績に視点を当てて [中間報告]』.
- , 2011, 『富岡製糸場総合研究センター報告書日本国の養蚕に関するイギリス公使館書記官アダムズによる報告書——アダムズ報告書 (第1次～第4次とブリユナらの報告書)』.
- 富岡製糸場誌編纂委員会, 1977, 『富岡製糸場誌』 富岡市.
- 難波知子, 2020, 「富岡製糸場における女子作業服の変遷」, 富岡市, 『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』 51-86.
- 藤井清美, 2017, 『明治ガールズ——富岡製糸場で青春を』 角川書店.
- 松浦利隆, 2007, 「昭和 (片倉) 時代の富岡製糸場の歴史」片倉工業株式会社, 『写真集富岡製糸場』.
- 茂木祥史, 2017, 「富岡製糸場の労働と暮らしにかかわる調査について——これまでの経緯と今後の計画」, 富岡市, 『平成28年度 富岡製糸場総合研究センター報告書』 105-114.
- 山田智子, 2020, 「富岡製糸場における女子寄宿舎の建築構成の変遷と女性労働者の生活環境——鎭寮、浅間寮・妙義寮を中心に」, 富岡市, 『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』 25-50.
- 和田英, 2014, 『富岡日記』 筑摩書房.
- 厚生労働省, 2017, 「平成28年度人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況」(2021年1月23日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/konin16/dl/gaikyo.pdf>).
- 男女共同参画局, 「平成18年度版男女共同参画白書」(2021年1月31日取得, https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h18/web/danjyo/html/honpen/chap01_02_01.html).
- 富岡市, 2017, 「富岡製糸場映画の概要について」, 富岡市ホームページ (2020年12月14日取得, <https://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1474958773922/index.html>).
- 聞き取り調査記録
- A氏インタビューノート (2020年9月15日実施)
- B氏・E氏インタビューノート (2020年10月20日実施) (B氏・E氏に同時インタビューを実施)
- C氏・F氏インタビューノート (2020年12月20日実施) (C氏・F氏に同時インタビューを実施)
- D氏インタビューノート (2020年12月26日実施)
- G氏インタビューノート (2020年10月26日実施)